

# UCC 水素焙煎が広げるコーヒーの可能性



藤原係長

UCC上島珈琲は、2022年から水素を熱源としたコーヒー焙煎機の研究を進めている。本紙は小型実機がある兵庫工場を視察し「嗜好品のコーヒーとしても大きな可能性がある」とするSCM本部の坊山勝征同工場工場長、藤原朋宏生産部安全・設備課係長を取材した。

「水素焙煎機」は、その名の通り水素を熱源として焙煎し、天然ガス等の化石燃料(以下ガス)を使う従来機と比べ環境負荷を低減できる。ただ、従来のコー

山工場長)、「加熱スピードはガスと同等に制御しているが、必要な量は4倍」(藤原係長)などハードルも多「外部は『そこまで投資する価値があるのか』と思うかもしれない」(坊山工場長)。

しかし、研究の多くを務める藤原係長は「作れる味わいの幅広さを日々実感している」と強調。前述したように水素



水素焙煎機

はガスに比べ使用量は多いが、「燃えやすい」特徴により火加減を微調整する範囲が広がり、伴って様々な焙煎プロファイルの設計が可能になっているという。コーヒーにとって焙煎プロファイルの多様さは、即ち味わいの多様さであり、坊山工場長も「コーヒーの可能性を広げる試み。投資も時間も費やす価値はある」と同様の考えを持ってい

同機で焙煎したコーヒーはUCCグループの展示会、環境系のイベントなどに提供しているが、本紙が視察した7月某日はテスト的に業務用製品が出荷され、事業としてのフェーズがまた一歩進んだ印象を受けた。今後について藤原係長は「焙煎プロファイルをもっと充実させたい。コーヒーの核は、品種×焙煎×ブレンド」だが、ここに水素が加わることでよりUCCの味わいづくりが幅広くなる」と展望。坊山工場長も「公表当時は『環境』の印象が強かったが、これからは同時に『おいしさ』を追求していく」と意気込んだ。

(石母田景)

## 環境配慮もおいしさも追おう



水素焙煎

ヒール工場にはない水素供給システムの開発など、ほぼゼロベースで土台を構築する必要があり、加えて「燃えやすく、工場関係者はリスクを懸念するだろう」(坊

山工場長)、「加熱スピードはガスと同等に制御しているが、必要な量は4倍」(藤原係長)などハードルも多「外部は『そこまで投資する価値があるのか』と思うかもしれない」(坊山工場長)。

同機で焙煎したコーヒーはUCCグループの展示会、環境系のイベントなどに提供しているが、本紙が視察した7月某日はテスト的に業務用製品が出荷され、事業としてのフェーズがまた一歩進んだ印象を受けた。今後について藤原係長は「焙煎プロファイルをもっと充実させたい。コーヒーの核は、品種×焙煎×ブレンド」だが、ここに水素が加わることでよりUCCの味わいづくりが幅広くなる」と展望。坊山工場長も「公表当時は『環境』の印象が強かったが、これからは同時に『おいしさ』を追求していく」と意気込んだ。

# 気候変動に強く地球を支えるアメリカ大豆



アメリカ大豆が目指すSDGsの6つの最優先目標

安全な水とトイレを世界中に



アメリカ大豆 SSAP認証ロゴ

## SUSTAINABLE U.S. SOY

日本で多くの大豆製品に使われているアメリカ大豆。限りある資源を大切に「次世代によりよい農業経営をつなぐ」をモットーに生産されています。SSAP認証制度により、環境への負荷が少ない方法で生産・管理・出荷された大豆だと証明され、CO<sub>2</sub>排出量も最低限におさえ「気候変動対策」や「脱炭素化」にも貢献している食材です。